Title	高等学校英語オーラル・コミュニケーションの実態調査
Author(s)	市川, 研
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 239-248
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=84
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

〈研究ノート〉

高等学校英語オーラル・コミュニケーションの実態調査

― アンケート調査を中心として ―[1]

市　川　　研

A Survey of the Actual Conditions of “Oral Communication” at High Schools:
Focusing on a Questionnaire

Ken ICHIKAWA

The revised edition of the Japanese ministerial “Course of Study” for English in high schools was adopted in spring 2003. OC (Oral Communication) levels A, B, and C were integrated into a new system designated as OC-I and OC-II. It would seem beneficial to examine what contemporary high school students in Japan think about the new OC system. According to previous studies, the teaching and learning of the former system (OC - A, B, C) was not considered to be very successful. The purpose of the present study is to investigate the OC situation in high schools today by means of an analysis of questionnaires returned by students and to see how these findings can be applied to current classroom teaching. The results of this study bring out the following two points:

1.) The revised Course of Study has integrated the four basic English skills (Listening, Speaking, Reading and Writing) with a focus on Listening and Speaking skills.

2.) The returned questionnaires show that contemporary high school students do not believe that the new system is very effective. It might be considered desirable to consolidate fundamental English skills for Japanese students by revising a textbook such as the integrated “English I - IV” in which all four basic skills are emphasized.

It is important to continue this research in order to discover whether the new OC-I and OC-II system is effective or not. Such findings would contribute to improving the communicative proficiency of Japanese high school students.

Key words: English Education, Oral Communication, The Course of Study, English Class Activity, High School

執筆者の所属：基礎総合教育部

論文受理日2005年11月21日

1：はじめに

2003年より高等学校学習指導要領・外国語（英語）が改訂され，オーラル・コミュニケーション（以下 OC）は OC-A，B，C から OC- Ⅰ，Ⅱへ変更された。大学英語教育においても発信型，実践的コミュニケーション力養成が求められている中，大学入学生達が高校でどのような口頭英語を学習してきたのかを調査することは意義のあることと考えられる。先行調査によると OC にその顕著な成果があったとは述べられていないが，実施開始後約10年経った現在の状況はどんなものなのであろうか。本稿では高等学校 OC の現状と成果をアンケート調査を基にしたものにて示し，今後の高校，そして大学英語教育にどう役立てるかなどを考察する。

2：OC の概要

1989年に学習指導要領が改定された際，実践的コミュニケーション能力の養成に重点をおいた OC-A，B，C が誕生し，94年より実施され，OC-A は日常会話，OC-B は Listening，OC-C は Speech，Discussion などに分類されたが，98年度の学習指導要領改定では OC －Ⅰ，Ⅱへと変更された。学習指導要領による位置づけは全体的特長として４技能は切り離して学ぶものではなく，有機的に関連しているとの見方が伺え，実践的コミュニケーションが行えるようにより深く配慮されたものとなった。単位数は OC- Ⅰが２単位，Ⅱが４単位となっており，英語Ⅰ（３単位），Ⅱ（４単位）と OC のどちらかを選択するのであるが両方選択している高校が多いのが現状である。

科目としての OC は他の科目と同様，教科書を中心に授業を進めている高校が多いが，どんな教科書が使用されているのであろうか。大手出版社の代表的なもの８冊[(2)]（OC- Ⅰ）と５冊[(3)]（OC- Ⅱ）の教科書内容の概略を以下にまとめると，カラー写真などが多く，鮮やかで大版ものが多い。基礎練習，Listening，Listening Practice などに加えて Presentation，Pair work，文化紹介，Debate なども入っているものが多く，今迄バラバラだった OC‐A，B，C から OC- Ⅰ，Ⅱへ統合された観がある。当然の事ながら Listening，Speaking は必ず入っており，Reading，Writing の項目もある本もある。見る，聴く，書く，読む，喋る，Pair/Group work，と盛りだくさんの内容である。また，バラエティに富んだテーマ，一貫性のあるテーマ（外国人留学生が日本で高校生活をおくる話），映画（５本の映画からそれぞれ３つのシーンを選び，始めから連続させるとその映画の全体も理解できる），難易度別に３ユニットに分かれ多様なテーマを扱っているもの等，工夫を凝らした教科書もある。基本的に OC- Ⅱのテキストは Ⅰの内容とほぼ同じであり続編と見てよい。

３：OC の実態　－アンケート調査から読み取れること－

３－１：先行研究

北村，竹内（1998）は高等学校外国語 OC 授業の実態について調査し，主として高校生はどう受け止めたかを分析している。彼らはアンケート調査を実施し，教師が OC を指導しにくい，OC が受験向きではない，評価が難しい，などの OC の抱える諸問題を提示し，北村，木村，竹内（2000）は OC-B の授業と学生の Listening 能力との相関関係について調査したが，有意な関係は認められなかった，と報告している。三岩（2001，2004）は OC 授業にのみ Speaking 指導が委ねられており，英語Ⅰ，Ⅱでは旧来のやり方で授業を行っている高校が多いと述べている。また，OC 内での Speaking 指導の70％以上が Pattern Practice であり，これでは本当のコミュニケーション指導ではないし，Listening，Speaking については予習，復習が容易ではない，などの問題点も提示した。また，市川（2003）によると学生，高校教師のアンケート調査による旧 OC の実態調査結果においては，OC という科目授業を行っているものの，半数近くは「受験対策」を行っており，まともに行った学校でも学生，教員ともに効果があったとは思えない，という回答が多く寄せられた。また，教員側では「基礎力もない生徒に OC を要求することが無理」，「４技能をバランスよく学習させるべき」，「コミュニケーション能力指導に偏りすぎである」などが複数回答として目立ち，顕著な成果があったとはいい難い結果を報告している。

いずれの先行研究でも英語コミュニケーション活動を行っていない，もしくは円滑に進んでいない，などの否定的意見が目立っている。

３－２：実態調査

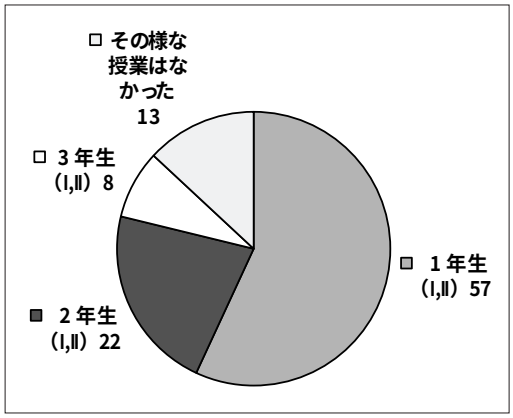
実態調査は学校や教員側からの回答を元にして行われることが多々あるが，生徒自身の声から見たものは少なく，「授業を受ける側」からの OC-Ⅰ，Ⅱの調査は本調査が初めてである。そこで高等学校における OC の実態についてアンケート調査を実施し，2005年４月に聖学院大学（188名），中京大学（85名）１年生の学生273人に対して行い，268人の有効回答を得た。ここに学生のアンケート調査の結果を示し，考察する。ここでは調査に関係のある結果のみを取り挙げ，必要に応じてグラフ（複数回答可能な項目を除く），説明，コメントを各項目に付けた。また，結果は268人からの声であり，全国の代表ではないことをここに記しておく。

尚，各項目において「複数回答可」の項目では％が出せないので多い順に並べ，％がある数値は小数点を四捨五入したため，合計100％にならない項目もある。

－アンケート内容（2005年４月実施）－

項目１：高校でオーラル・コミュニケーション（OC）の授業があったと思いますが，どの学年で，OC-Ⅰ，Ⅱもしく OC-A，B，C のうちのどれをやりましたか。

① １年生（Ⅰ，Ⅱ）57%
② ２年生（Ⅰ，Ⅱ）22%
③ ３年生（Ⅰ，Ⅱ）８%
④ その様な授業はなかった13%

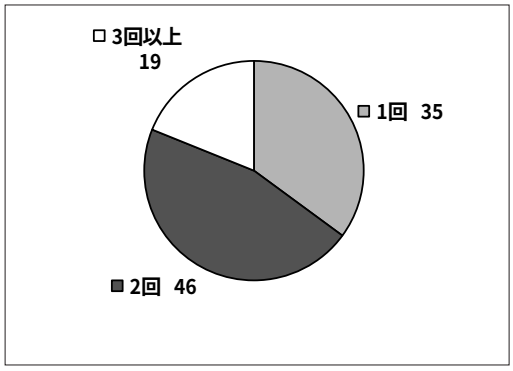


＊ 主に私立では ALT にクラスを担当させ週１～２回を２～３年間やらせている例が多い。週１だと３年間，週２だと２年間など。公立の場合，1年生時に週２回ほど行う例が多い。

＊ ３年生で授業を行う場合，受験対策である OC-G[(4)]を行う傾向が強くなる。

項目２：それらは週に何回，授業がありましたか。（項目１で④の13%を除いた残り87%の回答）

① １回35%
② ２回46%
③ ３回以上19%



＊ 第１学年，もしくは第２学年に週２回，もしくは２学年にわたって週１回受けていたものが大半を占めた。

項目３：OC ではどのような授業をやっていましたか。（回答の多い順）

① リスニング ② グループワーク ③ 対話練習 ④ ディスカッション
⑤ 文法問題集 ⑥ 特にやっていない ⑦ ディベート ⑧ プレゼンテーション

＊ ⑥に関しては意味不明であるがその他，もしくは受験対策などが予想される。

項目４：OC の教科書のレベルはどうでしたか？

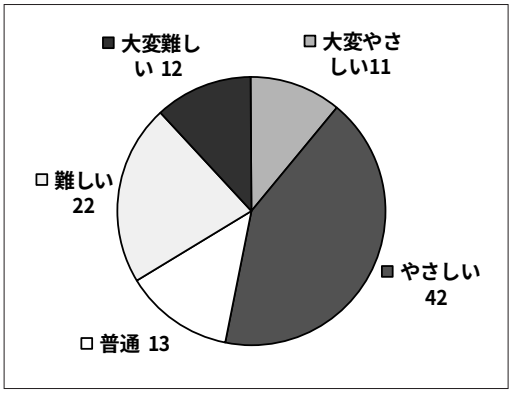
① 大変やさしい 11%

② やさしい 42%

③ 普通 13%

④ 難しい 22%

⑤ 大変難しい 12%



＊　約半数の学生がやさしかったと回答している。

項目５：教科書の他に何を使いましたか？（複数回答可，回答の多い順）

① プリント教材　② テープ,CD　③ ワークブック　④ 映画　⑤ 外国の教科書　⑥ VTR

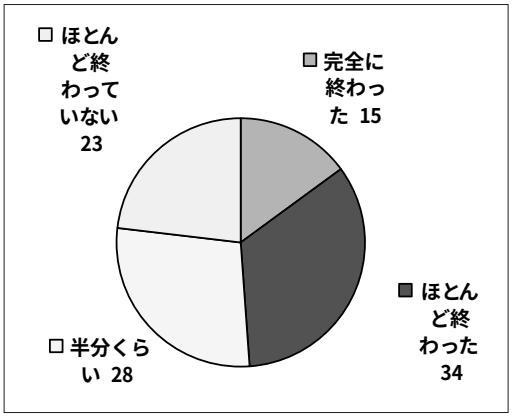
項目６：その教材はどの程度，やり終えましたか。

① 完全に終わった 15%

② ほとんど終わった 34%

③ 半分くらい 28%

④ ほとんど終わっていない 23%

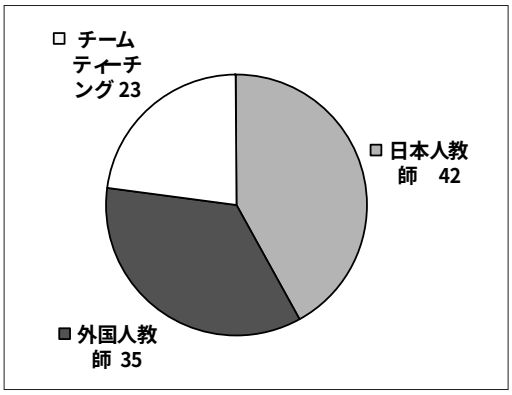


項目７：OC 担当教員は誰でしたか？

① 日本人教師 42%

② 外国人教師 35%

③ チームティーチング 23%



＊　私立，公立別に分別すると私立での ALT 率が若干高い。

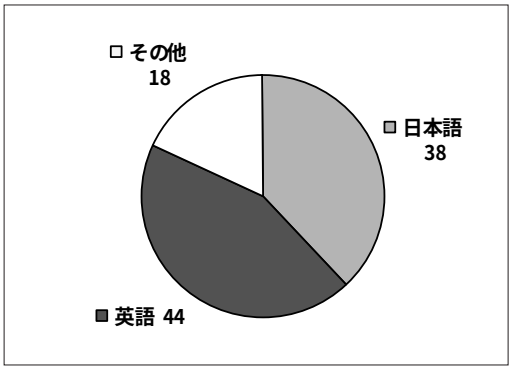
項目８：OC の授業における主な使用言語は何でしたか？

① 日本語 38%

② 英語 44%

③ その他 18%（両方など）

＊ ALT ならば英語で進め，日本人教師では日本語が多く英語での授業は少ない。



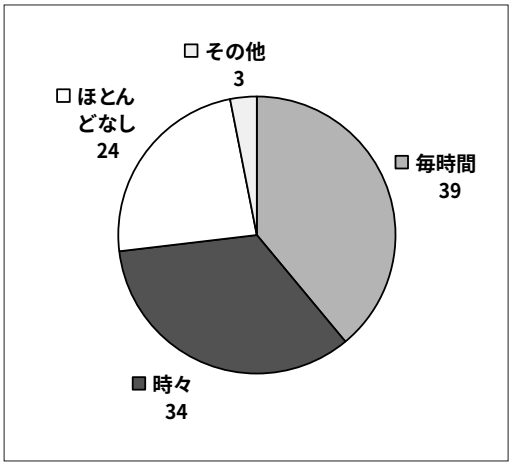
項目９：OC の授業でどの程度，テープや CD のリスニングを行いましたか。

① 毎時間 39%

② 時々 34%

③ ほとんどなし 24%

④ その他 3 %



項目10：OC の授業であなたは英語でのコミュニケーション能力がついたと思いますか[5]。

① 大いについた 4 %

② ついた 18%

③ あまりつかない 41%

④ ほとんどつかない 19%

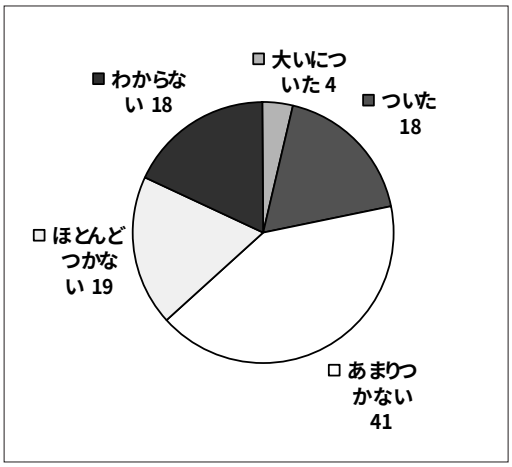
⑤ わからない 18%

＊ 高校別にまとめると

私立：ついた，

公立：あまりつかない，

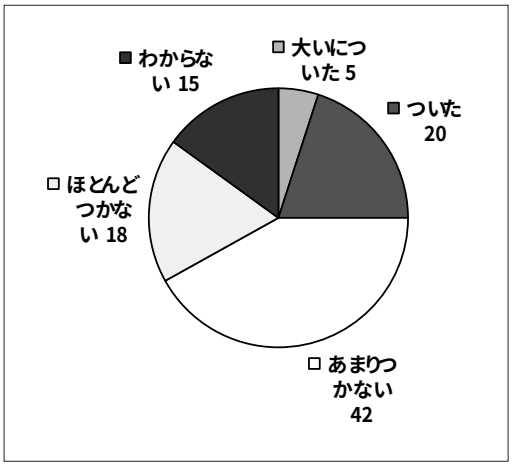
実業高校（工商）：ほとんどつかない，



が多い。

項目11：OC の授業であなたは英語のリスニング能力がついたと思いますか[(6)]。

① 大いについた ５％
② ついた 20%
③ あまりつかない 42%
④ ほとんどつかない 18%
⑤ わからない 15%



項目12：今までの高校の英語授業に対する成果，または不満などがありましたら書いてください（複数回答のあったものの多い順）。

・受験対策の R，G などをやっていた（OC-G）
・ALT の説明が英語だからわかりにくかった
・日本人教師の発音が悪い
・文法ばかりで飽きた
・レベルが低すぎて半分授業崩壊していた
・スピードが速くついてゆけなかった
・中学のときより英語力が落ちて嫌いになった

（その他少数意見）

・ALT のおかげで OC 力がついたと思う
・英語でのレポート，プレゼン，discussion はためになった
・洋楽を聴いての聞けた箇所の穴埋め問題は楽しかった
・文法（基本）がわからないのに会話など無理
・高校でもレベル別クラスにしてほしい

項目13：今後の高校の英語授業に対する期待，不安，要望などがありましたら書いてください（複数回答のあったものの多い順）。

・２～３種の英語授業があったがどれも同じようなものだったので一つに統合してほしい

・英語で授業をしてほしい

・高校レベルにあった授業をしてほしい（塗り絵，米国の幼児教育用教材などを使用していた，高校生にもなって歌など歌いたくはない，など）

4：考　　察

２大学273名の回答結果ではあるが，両大学とも学生は主として関東地方，東海地方の様々な高校から入学してくるので高校 OC の大まかな実態概要は知ることができる。結果として OC 授業は以前と変化していないと言わざるを得ない。特にコミュニケーション力（項目10），Listening 力（項目11）では力がついたと思う，と答えた学生が共に約１／４程度ということは学校格差，OC の評価の難しさという点を差し引いても OC が成功しているとは言い難い，と言っても過言ではないであろう。

新学習指導要領（2003年度より実施）は生徒のコミュニケーション能力養成をより重視して改訂され，テキストもそれに伴い主に Listening，Speaking を中心として少しでも４技能の力を生徒がつけられるように編纂された。今までは OC といっても内容は学校，教師によって様々であり，十分に実施されていたわけではない。加えて学校現場では生徒も OC に対して大きな成果があったとは言っていない。その原因を推測すると，

① 年々叫ばれている生徒の学力低下問題が挙げられると考えられる。OC 授業を行おうとしても基礎力そのものがない生徒が多数を占めるのであれば成果は芳しくないのは明白である。

② ①の原因の一つとして学習指導要領があり，「ゆとり」という名のもと，学習項目，授業時間数は減少する一方で内容についての強制力，拘束力も強くない。

③ 少子化，大学の増加で高校であまり勉強しなくても大学に入学できるという現状も無視できない。加えて OC が入試に役立たないという点がある。

④ 根本的な問題として EFL（外国語としての英語学習）という環境があり，英語の差し迫った必要性が少なく，その結果英語の接触，学習動機も低い。

以上の事項を踏まえ，より効率的な英語コミュニケーション能力養成のために何ができるかを考察してみる。まず，英語コミュニケーション力のみをつけることには限界があり，総合的にコミュニケーション活動を捉えてゆく視点が必要ではないか。岡（1999）や山本（1999）は OC や英語Ⅰ，Ⅱなどの枠組みをなくした統合的科目，教科書の必要性を説いている。総合英語Ⅰ，Ⅱのような科目の中で４技能を伸ばしてゆくのが望ましい，と述べている。つまり，OC や Reading など英語を細分化して捉え教えるのは不自然であり，学習効果も薄い，というのである。それゆえに OC-A，B，C から OC-Ⅰ，Ⅱへ改訂された事はその第一歩としては評価できよう。ゆくゆくは「英語は英語」としてバランスよく４技能を学べる「総合英語Ⅰ～Ⅴ」のような科目が必要なのではないか。教科書

は統合された１冊のテキストが理想であろう。英語Ⅰ～Ⅳなどになった All in One Textbooks などが望ましく，これ１冊でバランスよく４技能が鍛えられるようになっているようなものである。その中で英語を使ったさまざまなタスクを Class Activity として行い，コミュニケーション能力を養成してゆく方法ならばより効率の良い英語力養成の礎になるのではないか。その上でしっかりとした基礎力をつけるようなカリキュラムができれば理想的である。

生徒自身も英語を学ぶ，というモチベーションを受験以外で持ったり，英語の基礎を復習したりする事も重要であろう。教える教師側も OC の指導にもう少し積極的になり，自ら研修し自信を持って（できれば英語で）授業に臨んでほしい。指導に関しては生徒のレベルを知り，それに合った教材，指導法に沿って進めることが望まれる。加えてストラテジーの大切さを教える事も重要であるし，生徒のモチベーションを高め，英語が楽しくなるような授業展開を行うべきだと考えられよう。

5：ま　と　め

本稿ではテーマを OC という幅広いものにしたため，深く掘り下げる事はできなかったが，今回の調査によって高等学校 OC の現状が僅かながらにも垣間見る事ができた。英語の４技能をそれぞれ分けて教えるというやり方には限界が近づいて来ているようである。

英語でコミュニケーションができる，つまり本当の英語が使える日本人育成をするならば国レベルでより堅固な言語教育政策，大学入試改善，学校現場ではクラスサイズの縮小，質の高い教員の増加が少なくとも重要になろう。具体的には多くのテストや暗唱なども取り入れてもう少し詰め込み教育をして鍛え，OC を受け入れる（発信する）基礎力・土台を作るべきではないか。英語教員もネイティブである必要はなく，その代わりに英語でも授業のできるような英語運用能力が高い教員を養成するべきであり，また，仮にそのシステムを実行した場合，全ての学生，学校に適用する必要はなく，普通高校，進学校などに限定するなどしてもよいかと思われる[(7)]。

大学でも英語コミュニケーションなどの科目がほぼ必修という形で増加しているが，高校においてこのような状況であるので学生達が大学に入学後，急に英語ができるようになる可能性は低い。学習指導要領を改訂して高校から，できれば中学からでももう少し受信力，基礎力を強固にするような外国語教育政策ができればと願っている。

注：

(1)　本稿は大学英語教育学会 2005年度中部支部大会（於・東海学園大学，2005年６月４日）において口頭発表されたものに加筆修正したものである。

(2)　Birdland（文英堂），MAINSTREAM（増進堂），empathy（教育出版），Voice（第一学習社），DAILY（池田書店），OPEN DOOR（文英堂），Hello there（東京書籍），SCREENPLAY（スクリーンプレイ）

⑶　Birdland（文英堂），empathy（教育出版），Voice（第一学習社），OPEN DOOR（文英堂），SCREENPLAY（スクリーンプレイ）：OC という科目があってもⅠのみでⅡまでやらない学校，先生が本調査では約40%あった。よって出版されているⅡのテキストも５社程と少ないと思われる。

⑷　OC の授業を使い受験対策の問題集などを行う授業のこと。進学校などに多く，OC‐Grammar(G) などと揶揄されている。

⑸　これはあくまでも学生の個人的主観であり，客観的事実ではないが，彼らなりの自己評価を参考までに訊ねてみた。主観的回答からでも学生の授業満足度もある程度推測可能であると思われるためである。

⑹　注訳５に同じ。

⑺　これは中国，韓国で行われている英語教育システムに似ており，彼らは少なくとも日本よりも英語力という点では秀でており，日本も参考にすべき点があるかと思われる。

参考文献

市川研「高等学校外国語オーラル･コミュニケーションの考察－リスニングの分析－」,『LET 中部支部研究紀要』第14号，2003，pp.15-27

岡秀夫「教科書はこう変わる」,『英語教育』第48号４巻，1999，pp.25-27

加藤和美「オーラル･コミュニケーション授業の実態調査－大学生のアンケートより－」,『中部地区英語教育学会紀要』第34号，2004，pp.195-202

北村まゆみ，竹内政雄「高等学校オーラル･コミュニケーション授業の実態について－高校生はどう受け止めたか－」,『椙山女学園大学研究論集』第29号，1998，pp.97-113

北村まゆみ，木村隆，竹内政雄「オーラル･コミュニケーションＢと学生の英語リスニング力との関係について」,『椙山女学園大学研究論集』第31号，2000，pp.187-200

北村まゆみ「高等学校オーラル・コミュニケーションＢ教科書のタスク類型分析」,『LET 中部支部研究紀要』第12号，2000，pp.2-15

武田修幸「オーラル･コミュニケーションＢの授業－ Four Skills Activity を使った実践例－」,『英語教育』第49号７巻，2000，pp.20-21

東眞須美編著『英語科教育法ハンドブック』大修館書店，1992

三岩晶子「学習者の多様性から見たオーラル・コミュニケーションの功罪」,『中部地区英語教育学会紀要』第31号，2001，pp.335－340

三岩晶子「『英語Ⅰ』授業に関する実態調査と考察－新学習指導要領の導入－」,『中部地区英語教育学会紀要』第34号，2004，pp.15－20

文部省『高等学校学習指導要領解説』外国語編，英語編，東京：開隆堂，出版株式会社，2000

文部省『高等学校学習指導要領解説』外国語編，英語編，東京：教育出版株式会社，1986

文部科学省「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」
http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki/daijin/020714.htm 2002

山本良一「学校現場ではこう読む『高校』」,『英語教育』第48号４巻，1999，pp.20-21